

プリズムとリズムの交差

—文化・社会・人間のつながり—

草 津 攻

- 序 論 プリズムとリズムが「世界」を生み出す
- 1 プリズム (地図) とリズム (旅路)
 - 2 プリズムとリズムの交差
 - 3 交差軸の制御不能な揺らぎ
 - 4 交差軸の能動的ずらし
- 第1章 プリズム —差異化の働き—
- 1 ことばによる世界の分節化、アナログ世界のデジタル化
 - 2 サピエ=ウォーフ仮説、全体的思考／分析的思考
 - 3 言語共同体の不思議、閉じることによって生まれる無限の可能性
 - 4 幻想の共同体
- 第2章 リズム —突き動かす力、欲望—
- 1 五感のつながり
 - 2 存在のもろさ(fragility)が生み出す暴力性・攻撃性
 - 3 精神の重力／地球の重力
 - 4 低きものの共有／高きものの共有
- 第3章 プリズムとリズムの交差 (1)
歴史、傷、アイデンティティ
- 1 「エクスタシーの放棄」、エロティシズム、ファッションの技法
 - 2 存在のもろさゆえの気づき
—文化の両義性—
 - 3 距離の社会学、emic / etic の文化人類学
 - 4 日本社会論
- 第4章 プリズムとリズムの交差 (2) 差異と欲望
- 1 「私の欲望は他者の欲望」(欲望の三角形)
 - 2 日常生活における自己呈示
— E. ゴフマン—
 - 3 dyad (二者関係)／triad (三者関係)
— G. ジンメル—
 - 4 personal space, proxemics
— E. ホール—
- 第5章 プリズムとリズムの交差 (3) 成熟と喪失
- 1 鏡像の発達 — R. ザゾー
 - 2 想像界／象徴界／現実界
— J. ラカン—
 - 3 I / Me, 「一般化された他者」
— G.H. ミード—
 - 4 ライフサイクルとアイデンティティ
— E.H. エリクソン—
- 第6章 プリズムとリズムの交差 (4)
メディア交換図式
- 1 精神のトポロジー／(社会的) 共同体
— S. フロイトと E. デュルケム—
 - 2 行為システム論とメディア交換図式
— T. パーソンズ—
 - 3 イデオロギー — L. アルチュセール—
 - 4 監視型社会／生権力 — M. フーコー—
- 第7章 交差軸の制御不能な揺らぎ
—グローバル化—
- 1 地球全体に広がる社会的統合形態
— A. ギデンズ—
 - 2 「想像の共同体」— B. アンダーソン—
 - 3 直接的感覚を越えた「情報」の世界との対峙
 - 4 成熟／喪失の消去
- 第8章 交差軸の能動的ずらし —時間／空間の圧縮、逆フロー体験を越えるには—
- 1 速度、スペクタクル、シュミラークル、完璧なイメージ
 - 2 (逆) フロー体験
 - 3 「ダブルバインド」— G. ベイトソン—
 - 4 “Think global, act local and be yourself.”

以下、本稿は序論に相当する。

序論 プリズムとリズムが「世界」を生み出す

1 プリズム（地図）とリズム（旅路）

私たちが、ものごとを認識するとき、その姿は、光の当て方や焦点の絞り方によって異なって見えてくる。一つの側面が図として浮かび上がる時、他は地として沈む。図として浮上するものは「意識化」され、逆に地として沈むものは私たちの意識の外に置かれる。このとき「文化」は、私たちの認識を「地図化」し、対象世界についての判断と評価を導く装置として働いている。この地図化の働きは、意識の底に潜む無意識の領域、人の深い感情の動きと結びついている。そして文化を異にする「他者」との出会いによって、地図化の働きは顕在化する。互いの認識がずれ、衝突し、憧憬・不安・恐怖・憎悪といった人々の心の奥に潜む感情が呼び覚まされるのである。

現代社会の動きは、その拡がり、複雑さ、スピードの全てにおいて、歴史上比類がない。この先例のない社会を理解するためのキーワードが、「情報」・「メディア」であろう。私たちはそのなかを地図を携えて、自己を形成し、人生を生きていく。世界の中に生きる場所を定めるためには、生身の身体を離れた自己を想像し、体験することもときに必要である。力を振り絞って世界の際まで旅をし続け、世界の姿を捉え、世界の中に居場所を定める。その試みは、自己の身体から切り離され、直接的感覚を越えた「情報」の世界と向き合い生きることでもある。この「情報社会」・「メディア社会」において「他者」と出会う機会は格段に増加し、私たちは豊かなコミュニケーションを享受できるようになっている。

しかし、「情報」が多くなることには否定的な側面もある。ベイトソン（1972）によれば、シンボルの多義性によって論理階層秩序が混乱し、コミュニケーションについてのコミュニケーション（メタ・コミュニケーション）能力が未熟なまま育った子供は、ダブルバインド（解決不可能の連続した経験）によって「統合失調症」に陥るといふ。論理レベルの異なる禁止命令によって、「子供は母親の表現していることを正確に識別したことにより罰せられ、かつまた不正確に識別したことにより罰せられる（ダブルバインドに捕らえられる）」。「情報」過剰の世界においては、情報が階層化されない、あるいは統合されない状態に陥る危険性がある。

ダブルバインドを克服するためにはどうすればよいか。井上ひさし（2004）は接続詞の活用を提案している。

ヒトは、幼児期に感動詞を身につける。やがて彼らは人称代名詞の使い方を会得し、自我意識が芽生える。就学前後、その総仕上げは接続詞の習得である。接続詞を駆使することでコトガラの意味を確定し、継続し、否定し、仮定し、補足し、ひっくるめて<考えるヒト>になる。こうして「人間」が誕生する。…獲得した膨大な語彙群を整理するのも接続詞の役目である。…「宇宙——銀河系——太陽系——地球——アジア——東アジア——日本国——〇〇県——〇〇市——〇〇番地——自分の家」というふうには秩序づけることができるのも、接続詞や接続助詞があればこそだ。こうして接続詞を駆使することで秩序づけられた世界観、「世界とは、…」という見方をもとに、彼らはそれぞれの人生観を築き上げる。…接続詞こそが、<考えるヒト>をつくる。

複雑な現代世界で私たちはどう生きていけばよいのか。それを考えるためには、個々人に内面化された地図へのミクロな視座と、価値観・規範・イデオロギー・宗教など集団・社会・国家・文明を性格づける地図へのマクロな視座をつなぐことが有効なのではなからうか。それは、行為する個々人の内面（「心理」）に関心を寄せることと、行為を導きつつ行為によって形づくられていく人と人との関係の構造（「社会」）を俯瞰すること、この二つをつないでいくことでもある。

プリズム（地図）とリズム（旅路）のつながりは、場所感を確かなものとすることによって、記憶力を強化するのではないだろうか。脳科学の分野の知見が、この仮説をサポートするようである。脳科学辞典（ネット）によれば、記憶は場所細胞（place cell）の働きである。場所細胞は回想記憶（retrospective memory）だけでなく、展望記憶（prospective memory）、つまり、将来行おうとする行動を想起するための記憶に関連している。霊長類では視覚系と動眼制御系が発達しているため、実際に訪れなくともその場所についての情報を想起したり探索したりできる。この能力が実際に訪れる場所でなく、現在眼にしている景観に反応する景観細胞（spatial view cell）を形成して

いる（高橋晋ほか 2013年8月9日）。つまり、現在の空間認識（プリズム）が生きる時間の認識（リズム）につながっていくということである。

この二つをつなぐ接続詞を考えながら、本稿は現代世界の拡がりとお行き（「スケール」）を記した「地図」（プリズム）を、私たち一人一人が読み取り、独自の「ベース」と「パターン」（M. マクルーハン 1986:1987）で挑んでいく「旅路」（「リズム」）の可能性を探っていく。

各章で取り上げる題材と論旨を紹介しておこう。第1章と第2章は、中心概念であるプリズム（差異化の働き）とリズム（欲望、突き動かす力）を対比させ論じる。プリズムは論理図式のいわば横軸（空間軸）を、リズムは縦軸（時間軸）を構成している。この対比は、パーレンボイム／サイドの対話（『音楽と社会（Parallels and Paradoxes）』2004）、およびマクルーハンとグレン・ゲールドの関わり（浜 1996）からも示唆を得ている。

第1章はプリズムについて論じる。世界は一つではない。切り取り方によって、世界は異なった現れ方をする。存在のもろさ（fragility）が私たちの認識に深みを与え、世界を多元的で豊かなものにしていくという逆説。そのメカニズムを、ことばによる世界の分節化と地図化（図と地の構成、ゲシュタルト形成）の働きを通して考える。光の当て方（焦点の絞り方）によって、世界は異なった姿を現す。ことばにはお行きがある。

「ことばがものをあらしめる（はじめにことばありき）。」ことばは意味の切れ目を生み出し、世界を分節化する。それによって世界は秩序づけられる（鈴木 1973）。視点があつてはじめて対象が生み出される関係の世界（丸山 1984:121）である。F. ソシュールが述べたように、「事物そのものに先立って事物と事物のあいだの関係が存在し、その関係がこれらの事物を決定する役割を果たす。…いかなる事物も、いかなる対象も、一瞬たりとも即自的には与えられていない」（丸山 1984:10）。ことばは、独自の曲率、屈折率（プリズム）によって、アナログ世界をデジタル化し、いわば二項対立図式を生み出す。一義的に意味を呈示するシグナル（信号）と異なり、ことばは多義的な呈示をするシンボル（象徴）の体系として働いている。焦点の絞り方（光の当て方）が複数の文化を生み出す。文化の多義性を支える働きである（竹内 1981）。

社会学者 M. シェリフ（1968）の準拠集団論は、

現実に所属している集団だけでなく、想像的に準拠する集団から各人が強い影響を受けていることを明らかにした。ハイダー（1978）の帰属理論（attribution theory）は、各人が依拠する因果関係の図式（原因と結果の恣意的な設定）によって、神／悪魔、心の異常／関係性の異常、集団主義／個人主義といった二項対立図式が生み出されることを示した。

ミュラー＝リエルの錯視（一川 2012）、エッシャーのだまし絵（杉原 2011）、絵を見ることを通して各自が物語を作るアーヴィン・トリップ（杉原 2010）の TAT（心理学的投射法、課題統覚テスト）、言葉の相対性が文化の相対性を生み出すというサピア＝ウォーフ仮説（今井 2010）などに触れる。異文化を鏡とすることによって「恣意的必然の世界」の姿が露になり、それを通して私たちは自分が生きている世界に気づかされる。言葉の根源性は呪縛性でもある。「ことばは、考えを顕すよりもむしろ隠す働きをする」（フロイト）。こうして、「ことばの連鎖系によって文化共同体が形成され、この共同体は物語という手段によってそれ自身を解釈」（リケール 1978:25）しており、「文化は、人間に潜在する可能性とその現実性との間に橋渡しをするシンボルの体系」（ギアツ 1987）として存在しているということである。

文化と認識の出会いから興味深い現象が引き起こされる（ニスベット 2004）。ニスベットは、主体ではなく、常に主体とそれを含む背景や状況との関係に注目する東アジアの「全体的思考」プロセスと、主体を背景から切り離して主体だけに注目し、その動きや性質を分析、理解しようとする西洋の「分析的思考」を対比させている。背景との関係性に光をあて過ぎると、「対象の主体性と周りからの圧力などによる事情との区別がつかずらくなり、物事やある人の行動の原因について根本的な誤解をしやすい。」光の当て方（焦点の絞り方）の違いが、「状況依存型／状況非依存型」、「全体的認知／分析的認知」、「背景への関心／状況を主体性から切り離す傾向」、「関係性／内的属性（性質）」、「動詞で成り立つ世界／名詞で成り立つ世界」といった、異なった認識パターンを生み出すのである。このようにして、「I」／「私」、文明／野蛮、個別性（independence）／関係性（interdependence）などの対比が生み出されていく。

この「言語共同体」の不思議を、丸山圭三郎は、

シニフィアン（意味するもの、音の響き、記号表現）とシニフィエ（意味されるもの、記号内容）を対比させたソシユール言語学に依拠して描き出している。マックス・ピッカート（1964:234）は、言葉／沈黙を対比させ、沈黙は空無ではないと述べた。

すべて美しきものは深き影を有している。丁度言葉の輝きが深い沈黙に支えられているように。…言葉は沈黙から、沈黙の充溢から生じた。…正しい言葉とは沈黙の反響に他ならない。…沈黙は言葉なくとも存在しえる。しかし、沈黙なくしては言葉は存在しない。もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまうだろう。…言葉がそこから生ずることによって初めて、沈黙はおのが完成を獲得する（1964：234）。

「言葉は、ある生の体験が区切られるとともに生じ、それまで存在しなかった音のイメージと意味が共起する。」「読む」は「呼ぶ」に通じている。小林秀雄（1983）が「アヤ」「かたち」「すがた」と呼んだ、言葉の不思議である。

「名づけることは存在せしめること」、非在の現前行為なのである。

記号発生の現場にあっては、表現と内容を切り離すことのできない<不透明な存在>としてのコトバが生まれる。人の視線はこのコトバを通り越してその先にある意味や物物を見ているのではない。人はこのコトバを見ている。一切のシンボル化能力としてのランゲージュが姿を現す。このコトバの存在喚起力は、「思う」や「考える」ということばにも表れる。感性のただなかにこそ理性があり、理性のただなかにこそ感性の場があるのである。…私は語っていると同時に語らされているのであり、私を意識的に語らしめている無意識の力は、決して私の外部にあるものではないが意識的の自我とは異なる位相に属しており、体系ではない動きである（丸山 1984：251-5）。

言語は、閉じられた差異のシステムであり、「文化は一旦閉じることによって世界を開き」、「無意識は言語のように構造化されている」（ラカン 1992）。閉じることが逆説的に無限の可能性を生

み出している。

物語が人格の一貫性を支える。「自己アイデンティティとは、自分が何者であるかを、自己に語って聞かせるストーリーである」（Laing 1961）。「文化とは、われわれが自分自身をめぐり自分自身に語る物語の総体である。…自分自身を含めた人間の行為を日常生活のなかで理解する方式である」（ギアツ 1987；草津 1984）。

人間になるということは、ある個人になることである。文化は私たちを単一の種に形づくることと別々の個人に形づくることを同時に行っている。人間であるということは「誰にでも（anyone）」なるということではなく、「ある特定の誰か（someone）」になることを意味する。個別性をとおしてしか人間の普遍性は実現されない。「文化の最も優れた作品としての人間」（Plath 1983）が姿を現す。

第1章の結論は、社会科学の主要な分析軸である、S.フロイト（1977）の精神分析学とE.デュルケーム（1978）の社会学の対比である。幻想を抱くことなしには生存できない生き物としての「人間」に光を当てたフロイトの「精神のトポロジー」論と、幻想を抱くことなしには存続できない社会（共同体）に光を当てたデュルケームの「社会的連帯論」を対比させる。フロイトは、内面化された文化としての超自我（superego）と人間をつき動かす根源的の欲望としてのイド（エス＝欲動）、それらの相互作用によって形成される自我（ego＝社会を生きる私、調停機関）を論じた。デュルケームによれば、つき動かすものは社会の中に存在し、文化は社会の中に制度化（institutionalize）される。聖／俗、正義／悪、正常／異常などの分節化、たとえば異常を鏡として正常が浮かび上がる働きによって、社会的共同体の境界線が設定される。「犯罪は社会を活性化させる。社会が健康であるためには、犯罪が不可欠である。」犯罪者への憤りの感情を共有することによって、人々の連帯感が強化される。「健康」が、病気の状態から回復することを通して維持されていくように。第7章（交差軸の制御不能な揺らぎ—グローバル化—）は、このような幻想の根源性が生み出す悲喜劇を描く。

第2章はリズム（つき動かす力、欲望）、一切の二項対立を宙吊りにして意味の発生現場に立ち戻る可能性を手探りすること（リズム）の重要性を論じる。丸山（1990）は、人間は本能装置が壊

れた生き物であり、ことばの獲得とは「+(-a)」であり、ことばは本来過剰なものであることを指摘した。身分け構造／言分け構造、表層的言語による境界線の違い、差別は表層意識の絶対化から生じることを通して「恣意的な必然の世界」を描き出そうとした。

芸術表現の源には、プリズム（焦点の合わせ方）に表れる不思議がある。感覚の相互連関と全体性を示唆する事例を紹介してみよう。15世紀のフランドルで織られたタペストリー（つづれ織り）「貴婦人と一角獣」は六つのテーマを描き出していると考えられている。「味覚」、「聴覚」、「視覚」、「嗅覚」、「触覚」、そして「我が唯一の望み」という六つの感覚である。

<意味=現象>は、時に<意味=音>であり、<意味=形>であり、<意味=色>であり、<意味=味>であり、<意味=臭>、<意味=感覚>等々という形を取って現出する。…意味すなわち<生への関与性>と考える限り、一切の現象にあてはまることである。…ボードレールは、黄昏の海と空の無限を前にした自我が、限りなく拡散し消失するのと同時に限りなく収斂し充足する経験を詩って、これこそ「音楽的思考、花芽的思考だ」と言っている（丸山 1984：66-7；253）。

コンラッド・ローレンツ『ソロモンの指輪—動物行動学—』（1980）は、存在のもろさが暴力性・攻撃性を生み出すこと、そして武装の体系／制御の体系のバランスの必要性について述べている。生きものは自らの種（species）には攻撃を加えない。生き物には2つの種類がある。(1) 相手に致命傷を与えられる武器（くちばし、牙、つめなど）を持った生き物は、武器（武装の体系）と抑制装置（制御の体系）のバランスがとれているために、現実には武器は使えず、相手を信頼することになる。(2) 武器を備えていない生き物は、しばしば攻撃性を抑えられず、かえって残酷な行動がみられがちである。

自分の身体とは無関係に発達した武器を持つ唯一の動物としての人類（human species）は、この抑制を自分の手で創り出さねばならない。なぜなら、人間の本能はとうてい信頼しきれないからである。過剰殺戮する動物としての人間の姿が描き出されている。ローレンツによれば、「いわゆ

る人間的なものは、全てその起源を人間以前のものに負っている。」

山極寿一（2002;2007）は「殺戮しない類人猿、攻撃は共存の手段」であることを伝えている。殺戮を肯定する人類の不気味さを知り、弱者が仕切る引き分けに学ぶ必要性があるのではないか。個々のサルにとって攻撃とは自己主張する手段である。弱すぎれば相手に無視されてしまうし、強すぎれば相手の反感を買う。相手と状況によってそれをうまく駆使することにより、相手の抑制を引き出すことも、味方を得ることもできる。つまり、攻撃とは互いの主張に沿って行動を変えるための共存の手段なのである。

ハリー・ハーロー（1985）のサルの愛情実験は、動物の接触行為が育む「愛」の姿を描き出した。子ザルは、ミルクを出す金属製の母人形よりも、ミルクを出さない柔らかい母人形のほうに気持ちを向けた（proximity）。この実験では二種類の代理母人形が準備された。一つは滋養に満ちた針金の母親、もう一つは空の乳房と温かい微笑みをもつ布製の母親である。情動の（愛の）重要な基本変数は、「接触」による安らぎだった。愛は味覚からではなく、接触（による安らぎ）から生じる。「私たちの要求は単なる飢えよりも複雑であること、私たちはあらゆる犠牲をはらっても他者とのつながりを求めること、私たちは型にはまった美しさなど意に介さず、どれほど極端なものであっても常に最初に見た顔をもっとも愛らしいと感じること（in-printing）」が明らかになった。接触にまつわる暗い側面（母親は抱きながら殺せること）も否定できないが、人間は橋を架けようとするのである。どれほど困難であろうとも、ここからあちらへとつながりを築こうとする。愛には接触、動き、遊びの3変数が関係していると考えられるのではないか（スレイター 2005）。

プリズムがリズムに結びつけられていく「旅路」を活写した『海辺のカフカ』の文章を紹介してみよう。私たちはどのようにしてここに在るのか。

比重のある時間が、多義的な古い夢のように君にのしかかってくる。君はその時間をくぐり抜けるように移動をつづける。たとえ世界の縁までいっても、君はそんな時間から逃れることはできないだろう。でも、もしそうだとすると、君はやはり世界の縁まで行かないわけにはいかない。世界の縁まで行かないこ

とにはできないことだってあるのだから」(村上 2002: 428)。

身分け構造／言分け構造の対比が生み出す人間の過剰としてのシンボル化能力とその働きを丸山(1984: 72-5)は描いている。

＜意味＝現象＞を文字通り身の延長（非在の現前）である人工道具によって拡大再生産するからこそ、過剰なのである。「言葉は我々の実存が自然的存在を超越している、その過剰部分である」(メルロ・ポンティ)。…自然のプログラムを超えたいという欲望。ランゲージュは、それ自体が一つの過剰であると同時に、過剰な＜意味＝現象＞をもちたいと願う欲望の源でもある。人間という種の本能図式にそもそも存在しない＜意味＝現象＞すなわち＜非在の現前＞。ネガティブな差異化＝実体的に存在しない対象に関わる行為。このまがまがしき象徴化能力は、動物には見出せない。

浮かび上がってくるのは、視点があってはじめて対象が生み出される関係の世界である。＜身分け構造＞が安定したゲシュタルトであるのに対し、＜言分け構造＞は物象化したノモス（ラングの世界）、硬直したゲシュタルトであり、欲望が生み出した人工的用具の連関、偽物が偽物を生み出す関係の世界、物神の（フェティッシュな）世界である。丸山は、ソシユール言語学とラカンの精神分析学をつなぐ視点を示唆している。

個々の語は、語る行為の織り上げる巨大な織物のなかの、ただ一つの結節点に過ぎない。…言葉も語によるよりは語間に存在するものによって働きかけ、言葉は語るものによってと同時に、それが語らぬものによって何かを表す。言葉と混ざり合う沈黙の糸が生み出される。言葉とは、ある生体験が区切られるとともに生じ、それまでに存在しなかった音のイメージと意味が共起する（丸山 1990: 182-3）。

人間のまがまがしき象徴化能力は過剰としての文化を創出し、存在のもろさは暴力性と攻撃性に逆説的に繋がっていく。人は相反する二つの重力、

上へ向かう精神の重力と下へ向かう地球の重力のいずれをも背負って生きている。「翼を持つこと」と「根を持つこと」が、社会生活のリズムを生み出しているのである（ヴェイユ 1967; 1968）。

二つの重力は、論理図式の縦軸を構成し、タルコット・パーソンズの行為システム論やエリック・エリクソンのアイデンティティ論にも重なり、文化・社会・人間のつながりを解き明かすための貴重な示唆を与えている。エリクソンは、歴史上の事実（historical reality）と個人にとっての生きた現実（actuality of life）を関連づけている。以下のことばにも同様のメッセージを読み取れるのではないか。「『自分史』には自分の真実があるが、歴史的事実の多くは虚構だ。…戦争の見方も殺す側と殺される側では意味も評価も違ってくる」（色川大吉）。「本当に大切な問題」のありかとかたちは、その人によって実に多様です。…その問題と格闘するために全青春をかけても悔いがないと思える問題を手放すことなく、どこまでも追及しつづけることの中に、社会学を学ぶ、社会学を生きるということの＜至福＞はあります（見田 2006）。「歴史とは現在を生きる私たちが試みる過去との対話である」（カー 1962）。

人と人との「信頼（trust）」関係の根底には「低きもの」の共有が、多様な人々を結びつける「文明」の根底には「高きもの」の共有がある。そのことは、他者理解や異文化間コミュニケーション研究の重要な視座であり、政治学のハード・パワー／ソフト・パワー論（ナイ 2001）にもつながっていく。根底にあるのは、「文化は意味を構造化するもの」として人間を「限定づけるもの（constraint）」であると同時に、相互作用と意味解釈の過程で「創造されるもの（control）」だということである（Sites 1975）。より深い理解に到達しようとする行為主体の働きかけに応じて、文化はその姿を現す（草津 1984: 265）。

2 プリズムとリズムの交差

第3章、第4章、第5章は、プリズム（横軸）とリズム（縦軸）との交差が生み出す現象を扱う。交差の具体例、人と人との「出会い」の衝撃を伝えるエピソード、隔たりをめぐるドラマ（草津 1984）を紹介し、文化・社会・人間のつながり、それらの区別と統一について論じる。

「出会い」の衝撃は、切羽詰った状態（極限状況）が心の奥に潜むものへの気づきへと人を導いてい

く体験である。それまでは意識されなかった、個別性（個性）／普遍性（共同性）という無意識の底に沈められていた対比軸が浮び上がってくる。地震の体験を共有することによって集団の底に潜んでいたものに各自が気づくエピソード、学生時代のホームステイの旅で体験した異国の他者との出会いの喜び、別れの悲しみ、再会の夢の共有に関わったエピソードがあげられる。「サムライ福澤諭吉・アメリカの地に立つ」(NHK テレビ『その時歴史が動いた』)のエピソードもその例である。

深きものの共有、失われてゆくものへの想いが個人と集団のアクチュアリティを支えていること、西欧との出会いの衝撃を経て「市民社会」の本質の洞察へと向かう知の旅路を歩み続けた福澤諭吉の体験などのエピソードを通して、「限界」即「可能性」、文化は閉じつつ開くこと、文化・社会・人間の連関図式（各システムの独自性と相互浸透性）、深きものの共有（trust）と高きものの共有（「文明」）について考えてみたい。「異文化理解」とは、他者理解という迂回路を辿る自己理解の旅路（リクール 1978）ではなかろうか。

「サムライ福澤諭吉・アメリカに立つ」は、福澤が実体験を通して学び取ったプリズム／リズムを簡潔に描き出している。independence / interdependence、個人の能力や資質／役割、achievement（業績）／ascription（属性）、来るべき社会の組織化／身分制度、leadership（命令系統）／国籍の違い、適材適所／身分・序列、日本人とアメリカ人の共同作業／固定した役割、universalism / particularism、法／慣習、などの対比を体験し、福澤は、「文明」の「合理性」へ、その背後にある「社会（構造）」へと関心を向けていく。何気ないアメリカ人の暮らしの中にあるもの（人と人との関係のあり方）に彼は驚かされる。「これは不思議だ」という、書物では得られない知識。この西欧の衝撃が、福澤を西洋市民社会の研究（『西洋事情』）へ、「議論」「演説」「文明」などの造語へと向かわせた。

極限状況における共同作業（collaboration）は、リアリティのエッセンス（virtual reality）の認識（館 1992）に向かわせる。嵐の船内での福澤の体験は、切羽詰った状況で力を合わせて危機を乗り切っていく体験だった。本居宣長が語る、「考える」=か + む（身） + かう（交う）につながる体験である（小林 1983：48）。

身を挺すること（commitment）は、信頼する

こと（trust）と知ることが結びついた“virtual reality”体験だった。濃密な時間／空間の体験は、「終わりなき日常」（宮台真司 1998）の対極に位置し、人間存在の個別性／共通性をつなぐ体験である。「わかる」とは、リアルな（アクチュアルな）世界認識・気付きであり、感覚と認識がつながる体験である。

福澤のこの体験を踏まえて、柳父章（1982）は、範囲が狭い「世間」・人情／広い世界としての「社会」・法を対比させている。意味が乏しいから乱用される翻訳語の「カセット効果」が、そこから生まれてくる。

福澤の体験と気づきには、「比較」という行為のエッセンスが表現されている。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり」（『学問のすすめ』）。彼は、異なった「制度」をもつ異なった社会を発見し、市民社会の本質を捉えた。異文化を鏡として世界を発見した。「国家の独立は個人の独立を基とすることを看破した明治の偉人、福沢翁。あなたは今いづくに」と、敗戦時の日本人は問いかけた。

阿部謹也（1988）は文明／文化の対比を、西洋中世史の研究を通して呈示した。新しい人間関係の成立は、機械時計の発明（テクノロジーの発展）と相まって、人間関係が客観的な基準によって計られてゆき、均質的な時間や空間が生まれる出発点でもあった。贈与・互酬関係の中心に教会が介在することになったその結果として、個人と個人の関係に絶対的な価値としての救いの問題が介入し、それが教会という権威と、国家や都市という制度によって支えられているという状態が生まれた。このようにして生まれた「誓約」は、人間関係の全体を合理的で予見可能なものにした。そこから阿部は、「文明」（11、12世紀にヨーロッパで成立した新しい人間関係に基づく文化）／「文化」（地域の色に染まり、他の地域のひとには容易に理解できない深みをもった、いわば非合理的な特徴をもたざるをえない文化）を対比させる。

第3章のテーマは「歴史・傷・アイデンティティ」である。「成熟」とは、ある特定の間になること、大切な何かを獲得していくというよりも、むしろ逆に大切な何かを喪失していく過程ではないだろうか。私たちは二つの人生を生きることはできない。無限の可能性を喪失していくことによって、ある特定の誰かになっていく過程、anybodyとしてではなくむしろ somebody とし

て、生きる世界を縮減させていく「エクスタシーの放棄 (standing outside oneself) の過程」(Laing 1961;1969) ではないだろうか。「女の子は『女装』によって女になる」(鷲田 1996)。「定まった本能装置を備えた動物にとって『世界』は閉じられている。人間の世界は開かれている。この開かれた世界を閉じるための装置としての「文化」…」(鷲田 1998)。

文化(コスモス)と自然(カオス)とが出会うところに、人生のこのアイロニーは生まれる。衣服の裂け目に生じる現象、一旦隠してその後で露にするとといったエロティックな行為の中に、それを読み取ることができる(バタイユ 1973)。差異化と同一化が拮抗する現象としてのファッションとモード、見せつつ隠す技法としてのコケットリーに関わる現象である(ジンメル 1976; 山田 1997)。一旦隠すことによって差し出すものの価値を高め、秘密があるかのように装い、人目をさえぎることによって人目を引くというパフォーマンスである。

存在のもろさによる気づきは、失われしものへの想いを強化する。アナログ世界のデジタル化は、こうした文化の両義性を生み出す。「メタファー」の活用は、この両義性に向き合うことばの技と考えられるのではない(Mair 1976; 草津 1984)。また、「比較」という行為の根底には距離のパラドクス(「両義性」)がある。「比較」とは、深いものの共有を踏まえた知の技法である。金沢創(2003)は、「『私の心』、まず他者の心の中に、他人と『心が通じる』ことの謎」を分かりやすく語っている。

まず他者が「心をもつ存在」として世界に現れる。そして、「他者の心が私の心を意識している」ことに気づいて初めて、「私の心」が生まれる。「自分のことを考えるよりは、まず他者を意識した方が、駆け引きに有利になって生き残りやすくなる。…ニホンザルは、他者を意識しているようには見えない。類人猿のチンパンジーになると、一緒にいる人間をちらちらと見るなど、他者の心を意識しているようにみえる。でも、自分が他者に見られていることがわかっているかどうかは、微妙。…コミュニケーションとは、情報を正確に伝えることではなく、他者の心を知ろうとする『賭け』である。…コミュニケーション

とは、真剣にやりさえすれば危険と背中あわせのスリルに満ちた、他者の心をめぐるゲームなのかもしれない。

明瞭な(articulate)情報中心の語りかけ(report talk)よりも、共有を可能にし、聴衆をひきつける(engaging)情緒中心の語りかけ(rapport talk)のほうが効果的であること、2008年の米大統領選におけるスピーチはそれを示している。“I”と“We”の使用頻度は、オバマ>クリントン>マケインの順で候補者ごとに異なっていた。オバマ候補は“We say, we hope. We believe, yes we can.”と聴衆に語りかけた(東 2007)。

以上のことを踏まえて、「国際主体」と「隔たり」の取り扱いについて、そして、何故、比較するのか? 何を、比較するのか? モノを媒介とする関係と目に見えない絆で結ばれた関係(阿部 1988)について考える。ジンメルのstrangerの社会学(1976)と文化人類学のemic/eticに関わる研究(Headland et al. 1990)に言及する。emicはphonemics(音素論)、localなものに関わり、ある言語体系の中の音の働きに注目し、内的に妥当な基準とある特定の社会に注目する、文脈に依存した(contextual)視点である。それに対して、etic(phonetics 音声学)はuniversalなものに関わり、外から普遍的に妥当だと思われる基準を持ち込み、特定の社会を超えた普遍性を強調する比較の(comparative)視点を有している。

R. J. スミス(1995)は、emic/eticの視点から日本社会を分析し、次のように述べている。

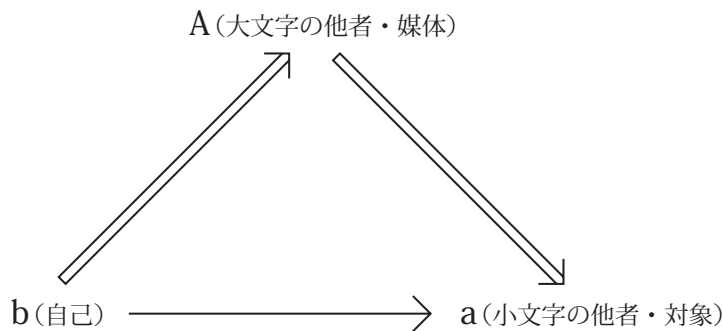
ある点において、日本人の現世志向は個人に圧倒的な重荷を課す。次の例はその重荷の性格を最もよく示している。今日でも多くの人々が、あることのために先祖の霊に力添えを求めて家の仏壇の前に座る。基本的にはそれは、自分のことに霊が介入するのを願うためではなく、むしろ、生前に先祖たちが与えてくれた無条件の愛と支えを、継続して与えてくれることを願うためである。重荷は、このことに存在する。もしも目標を達成できたら、人々は心からの感謝を捧げ、先祖の力添えによって努力が報われたと報告する。もしもうまくいかないときは、同じく心の底から先祖の霊に自分の不十分な点を詫げる。人間の失敗について、神にも先祖にも責めを負わ

せることはできない。それはむしろ、その人の内にある欠点や、その人の努力や献身が足りなかったことから来ているとされる。最もありふれた例をあげれば、子供たちが失敗の言い訳に他の誰かを非難しようとする、両親が子供たちを叱りつけるのは、ごく当たり前である。明瞭に伝えられるのは、次のメッセージである。人が人生において何を成し遂げるかは、結局のところ、その持てる力を最大限に発揮しようと努める度合いに帰着する。もちろん、所属している集団から支持を得られるかもしれない。しかし、すべてのことが言われ、なされたあとは、その個人のみが責任を負う。だから結局、日本人の観点はこうなる——ただ献身と精励を通じてのみ、人類は唯一知りうる社会と運命をこの世に創り出すことを期待できる。なぜならば、それ以外には何も存在しないからである（スミス 1995）。

日本社会と個人主義の関係、そこから生まれる日本人の背負う「十字架」について、同様の指摘がなされている。河合隼雄（1980）は日米の夫婦関係／親子関係を、リーブラ（Lebra 1986）は恋愛結婚／見合い結婚、対等な関係／甘えを、プラース（Plath 1983）は co-biography / auto-biography を対比させている。

第4章のテーマは、「差異と欲望」、欲動（生のエネルギー）／制御（コントロール）、暴力性／至高性である。他者（第三者）の対象への欲望を模倣することによって対象への私の欲望が生み出されるという「欲望の三角形」（「私の欲望は他者の欲望」論）（ジラル 1971）を取り上げる。「無意識は言語のように構造化されている」という視座（ラカン 1992）を踏まえ、ジラルは「私が語るというよりは、私は語らされている」という大文字の他者による欲望の媒介図式を提示した（図1）。

図1 欲望の三角形



この図式は、二者関係(dyad)／三者関係(triad)の対比（ジンメル 1976）にもつながる。シュマーレンバッハ（Schmalenbach 1961）は、ジンメルを踏まえ、社会関係の三つの類型を communion（感情の絆）／society（利害関心、契約、法）／community（伝統）という図式で呈示した。

印象操作、焦点の定まった相互行為／焦点の定まらない相互行為、シナリオ／舞台／役者、表舞台／裏舞台などの概念を駆使し、日常生活における自己呈示の多様な技法を描き出したゴフマン（1976）のパフォーマンス論は、マクロの視点とミクロの視点をつなぐ意欲的な試みである。ゴフマンによれば、我々はこの世界に個人として登場し、性格を身に付け、さまざまな役割を持つ人

間になる。person の第一の意味は、「仮面」である。外面、劇的具象化、理想化、偽りの自己呈示、神秘化、社会的距離、リアリティとたくらみなどの具体例を通して、ゴフマンは、「繊細な壊れ物」としての人間、「象徴の鎧の裂け目に突きかかろうと待ち構えている」人間たちのドラマを活写した。像のずれ、関係の相克、葛藤を含みもつ儀式的秩序（to save one's face）の様相が描き出される。ゴフマンのパフォーマンス論は、パーソナル・スペース論やエドワード・ホール（1966）の proxemics につながっていく。

第5章のテーマは「成熟と喪失」である。社会化されなかった子供（アヴェロン野生児）の研究、幼年期における鏡像と自己認知の研究（ザゾ

1999) を取り上げる。合わせ鏡的現象、「鏡像」(an image reflecting an image reflecting an image …)、相互依存性の世界、fusion と crossover の世界が生み出される。J. ラカン (福原 1998) は、この鏡像との一体化 (鏡像段階の現象) が the imaginary (想像界) を、そしてそれが成熟の先取りとなって、フロイトの「エディプス・コンプレクス」(父の像との一体化) による the symbolic (象徴界) の構成へと移行していくことを論じた。象徴界の構成とともに、その対極にある言語化不能の不気味なるもの the real (現実界) が成立する。G.H. ミード (1995) は、条件反射と模倣から遊戯 (play) へ、そしてゲーム (game) を通じて人生 (人間関係のゲーム) を味わうための必要条件である trust が育まれていく「自我形成」の過程を分析した。socialization (社会化) は人とつながる力の形成を、sociability (社交性) は社会という関係それ自体を遊戯することを意味する。自己を「他者の働きかけに対する応答のシステム」と捉え、I / Me, 「一般化された他者」の考察へと向かった。これらの理論はいずれも「成熟」を他者との関係性に支えられ、まがまがしき象徴化能力を形成していく過程として捉えている。

わたしの顔を私は終生、じかに見ることはできない。… 微調整…。身体はわたしにとっては、知覚されるひとつの物質体であるよりもむしろ、想像されるひとつの<像>—それは、皮膚で包まれた物質体としての身体を溢れ出たり、めり込んだりしている。『各人はそれぞれおのれ自身にもっとも遠い者である』(ニーチェ) (鷲田 1998: 105-7)。

その延長線上に E. H. エリクソン (1989) の life cycle 論がある。五感の全体性が人格形成に決定的な役割をはたしていることをエリクソンは描き出した。母子関係における trust は人生というゲームを演じていく (「非在の現前」) の力を形成し、母語 (mother tongue)、言葉の道へと人を誘っていく。濃密な意味空間、感覚の響き合い、信/知、モノ/コトの連関が世界への関与性 (意味) を生み出す。basic trust (根源的信) / mistrust (不信) は hope (希望) という virtue (精神の輝き) を生み出し、それが文化/社会/人間の共同作業の礎となる。

この世に生を受け、人生が開始されるこの時期、それを特徴づけるものは、暗い衝動と憤りの感情である。その後長く存続することになる孤独への怯えが、ここから生じてくる。それにも拘わらず、根源的な望みをかなえることができるという信念を失うことなく守り続ける力 (power; capacity)。

この力は、丸山 (1984) の語る「まがまがしき象徴化能力、過剰としての文化」につながる。人間は自然からはみ出したこと (プラス) により、自然を失った (マイナス)。自然のプログラムからはみ出した「過剰としての文化」が内なる自然を破壊した。<言分け構造>をもったために<病める動物>になった。「ある日突然に、小さなサルは幻を見た」(K. ローレンツ 1980)。幼いヘレン・ケラーが“Water”と初めてことばを発した時、世界は<モノ>ではなく、文化の網の目の中に位置づけられる<コト>として誕生した。

配慮 (take care) の焦点の移動として、エリクソンは「成熟」を捉えた。“What to take care?” (思春期) から、“With whom to take care?” (青年期) を経て “Whom to take care?” (成人期) へと配慮の焦点は移動していく (草津 1990)。歴史上の事実 (historical reality) / 生きた現実 (actuality of life) の区別と統一を論じる視座は、文化と認識の出会いから、「異文化を鏡として世界を発見する」(草津 1984) 可能性へと繋がっていく。フェミニズムの視点からライフ・サイクルを考察したキャロル・ギリガンの『もう一つの声』(1986) は自己形成論に拡がりを加えた。文化の多様性が個性の実現を支えるという視点 (青木 2003) に重なっていく。

ブリズムとリズムの交差の結論部、第6章「メディア交換図式」では、文化・社会・人間のつながりに関わる代表的思想を取り上げる。二つの重力論によって低きものの共有と高きものの共有に焦点を当てた S. ヴェイユ (1967; 1968) と自己の存在証明に焦点を当てた E. H. エリクソン (1989) は、縦軸 (リズム) を構成する。この軸に横軸 (ブリズム) を加えれば、第1章で取りあげたフロイト/デュルケームの対比が再び浮上してくる。

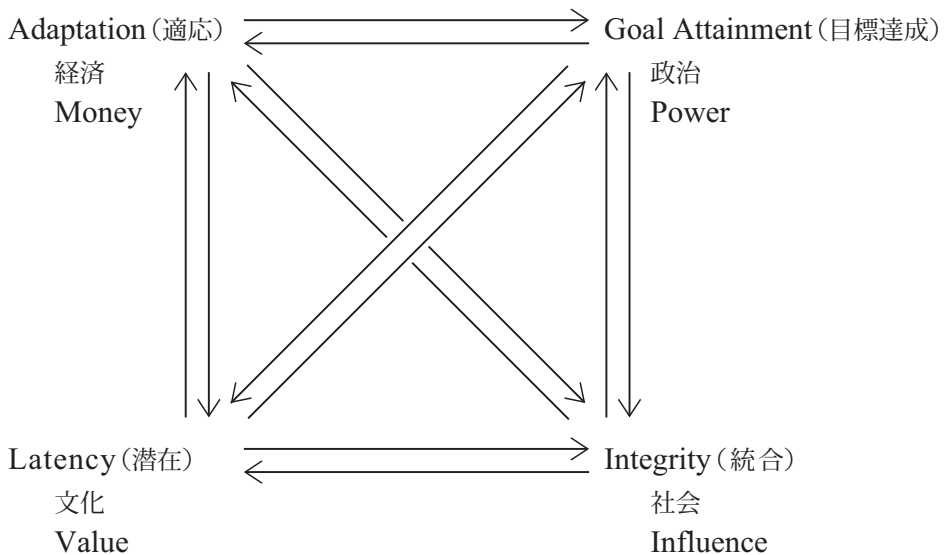
他の対比として、ジンメル/デュルケーム (Kusatsu 1989)、ウェーバー/マルクス (レヴィット 1966)、フロイト/マルクス (マルク

ゼ 1958)、ラカン／マルクスなどを加えられそうである。ラカン／マルクスの対比は、L. アルチュセールの「鏡的中心化」、「呼びかけ calling」(ウェーバー 1989) を中心概念として据えた「イデオロギー」論 (1993) に結晶化した。その延長線上に M. フーコーの監視社会論と生権力論が位置づけられる (1977; 2001)。ウェーバー／マルクスの対比の延長線上には、タルコット・パーソンズの行為システムの相互関連論を位置づけることも可能だろう (2012)。パーソンズは、文化 (象徴のシステム; 価値)、社会 (関係のシステム; 規範)、心理 (欲求のシステム; 役割とアイデンティティ)、生理的システムの相互関連によって構成される「行為の一般理論」を構想した。意味への渇き (精神の重力)、つながり、内的一貫性

と葛藤、そして欲動 (地球の重力) が相互関連する図式である。情報量が最大の文化体系は行為におけるコントロール機能を担い、エネルギー量が最大の行動有機体 (生命) は欲動・突き動かす力を有している。両者の間に、社会体系とパーソナリティ体系が配置される。ソフトウェア／ハードウェアの対比から社会秩序の維持／変動が論じられる。パーソンズは、これらシステムの分化／統合の進展が社会の近・現代化の根底にあるとしている。

行為者・状況・シンボリックなものの相互関連、行動有機体・パーソナリティ体系・社会体系・文化体系の相互関連を AGIL 図式は表現している。シンボル化能力と AGIL 図式の結びつきは、「メディア交換図式」(Mayhew 1982) を構成する (図 2)。

図 2 メディア交換図式



3 交差軸の制御不能な揺らぎ

第 7 章は交差軸の制御不能な揺らぎ—グローバル化—を考察する。グローバル化の過程で、直接的感觉を越えた「情報」の世界を生きること、今ここを生きることだけではなく世界の際 (縁、淵、涯、果て) へと向かう旅路を余儀なくされ、私たちは絶えず忘却され、失われていくものを抱え続けていくことになる (吉岡 2002)。西垣通 (1998: 194-7) は、ネット空間への旅路に伴うリスクを描き出した。

1997 年 3 月末、米国カリフォルニア州南部で

カルト宗教「天国の門」集団自殺事件がおきたとき、あまりにもシナリオ通りものごとが進んでいくことに、私は言いようのない空恐ろしさに襲われた。自殺した信者たち 39 人は、まるでどこかに旅立つようだった。…布教の武器はインターネットである。…SF と神秘主義と終末思想…三要素が、「天国の門」の教義をつくっていた。…身体をベースにした欲望はバーチャルな解決法では決して最終的にみたされることはない。…サイバー社会で注目すべき点は、自分の身体の否定が「教祖のバーチャル身体」の聖化につながること

である。…いらだたい欲望の増殖…。『天国の門』の誘惑は私たちすべてを待ち受けているのだ。

グローバル化と情報化の時代とは、世界の差異がより細分化されて見えてくる時代でもある。それは、現代人にとって大きなディレンマとなりえる。以前はお互いを知ることなく暮らしていた人たを近づけ、否応なくその「文化」の違いを感じ得させてしまう。「文化」の違いをめぐる悲喜劇は、こうしてありふれた日常の出来事となる。『偽物が偽物を生み出す物神の（フェティッシュな）世界』（丸山 1984：122）である。

スチュアート・ホール（1991：35-6）は、グローバル化が含み持つパラドクスを描き出した。アイデンティティの断片化と複数化が引き起こされ、そのことが皮肉なことに慣れ親しんだ世界への回帰を求めることにつながるのである。

慣れ親しむことができ、そこに住むことができる、対面的なコミュニティ、これを場所と呼ぼう。この場所では、どんな声が聞こえ、どんな顔が見られるのかみんなが知っている。グローバルなポストモダン（それは、言うなれば具体的な場所を基礎とするアイデンティティを破壊し、それをポストモダンの多様性の流れに投げ込んでしまった）に直面して、想像上の、身近な場所の再生と再建[が求められるようになる]。こうしてみれば、どんな時に人々がそうした拠り所と言うべきものにたどり着くのが判るだろう。こうしてたどり着いた拠り所を私たちはエスニシティと呼ぶのである。

生きる世界の変容が私たちに成熟／喪失の軸の消去、傍観者効果（ラタネ & ダーリー 1997；ローゼンタール 2011）あるいは、空気を読むこと・KY（山本 1983；土井 2008）を強いている。エマニュエル・トッド（2004）は、in-dependence/inter-dependence を対比させ、アングロサクソンの個人主義的で自由な文明とアラブ・イスラムの反個人主義的文明を比較し、アラブ・イスラム世界が抱える近代化の課題とグローバル化が生み出す暴力の可能性を示唆している。「近代化とは伝統的な家族システムを破壊することでもある。」変化の過程で新たな暴力が生じ得る。

「人権教育」に関わらせて、アグネス・チャン（2000）は自分のことを好きになること（self esteem）の大切さを強調し、日本の小学生たちはその点に関して納得できていないと述べている。「アイデンティティ教育」（自分のことを納得する力を育てること、自分の内側から力がみなぎっていくことを感じる）の大切さに触れ、「人権」は文化の違いにも関わらず、普遍的な概念であること、「人権感覚」の育成を強調している。一人一人が違うことの大切さを、日本社会は正しく認識していないのではないかと問いかける。

ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』（1997）は、ナショナリズムとグローバル化のつながりを実証研究によって明らかにしようとした。「社会は夢をみる。過去の事件を記憶し、傷を共有する。」聖なる言語（アラビア語のコーラン、ラテン語の中世ヨーロッパ、科挙の中国）と帝国の凋落によって、国民国家が成立した。ナショナリズムは、小説、新聞（一日だけのベストセラー）など、メディア（出版資本主義）が生み出す連帯感・一体感によって支えられた。この『想像の共同体』は独自の時間／空間の認識（時間の歴史性と濃密な空間認識）、重力、アイデンティティの混交性（文化と個人をつなぐインターフェイスとしてのアイデンティティ）を生み出した。梅森（2007：150-163）によれば、ナショナリズムという「図柄」の発展と拡散はその「下地」としてのグローバリズムへの関心をかきたてる。新たな地図／下地の作成、限定的な繋がりとは非限定的な繋がりとは、実は「ナショナリズムとグローバリズムが手に手をとって進んでゆく光景」を生み出している。時間と空間は切り離せない…。アンダーソン（2005）が語る『比較の亡霊』とは、「近代化論的な比較により抑圧されたグローバルな現実そのものを意味している」のではないか。

イマニュエル・ウォーラステイン（1997）によれば、「西欧文明は歴史上、他に例を見ないダイナミックな運動体として存在してきた。」精神の重力／地球の重力のドラマから生まれる意志（will）の力を『（権）力への意志』（ニーチェ 1993）は活写し、社会的共同体の夢（理想）を実現する道、約束、言葉として政治（politics）のエッセンスをハンナ・アレント（1994）は捉えている。

時代の流れや他人の思惑に取り残されないように空気を読み、絶えず情報をキャッチし続けていく姿勢をギデンズの『近代とはいかなる時代か？

『モダニティの帰結』(1993)は描き出している。ギデンズ(2001)は、グローバル化(「地球全体に広がる社会的統合形態」)の深化が現代社会の拡がり、複雑さ、スピードを加速させていくことに注目する(『暴走する世界 *Runaway World*』)。「今日の時代に至って初めて人間社会は実在することになった。」世界社会の相互依存性の増大は、しかしながら、一体化(統合)よりも社会的分裂と葛藤の動きを生じさせる。ギデンズは、5つのキーワードでそれを読み解こうとした。マクルーハン(1986;1987)が語る global village(地球村)ではなく global pillage(地球規模の略奪)、多様化する「リスク」(絶えざる「批判」と self-reflexivity・self-monitoring)、「伝統」をめぐる闘い(「根拠」の問い直しと fundamentalism、「家族」の変容)、「民主主義」の限界(制御「統治」の可能性の問い直し)。時間/空間の分離(time/space separation)の進行によって、居場所(place, location)は、空間上の地点(space)と化し、直接的感覚からの乖離と離陸(disembedding mechanism)の働きが生じ、再帰性(reflexivity)の進行は自己監視(self-monitoring)、深い疑惑(radical doubt)、リスクの増大を引き起こしていく。このような、ナショナリズムとグローバル化の屈折した関係を、サミュエル・ハンチントンは『文明の衝突』の中心テーマに据えた。

最も包括的なレベルの文明のアイデンティティが、冷戦後の統合や分裂あるいは衝突のパターンをかたちづくっている。…文明は最も範囲の広い文化的なまとまりである。…文明は人を文化的に分類する最上位の範疇であり、人類を他の種と区別する特徴を除けば、人の持つ文化的アイデンティティの最も広いレベルを構成している。…中国は一つの国を装っている文明である。日本の場合は、国すなわち文明である(1998:21-58)。

同書の「日本語版序文」には、次のような記述がある。「…日本がユニークなのは、日本国と日本文明が合致しているからである。そのことによって日本は孤立しており、世界のいかなる他国とも文化的に密接なつながりをもたない。」グローバル化のさらなる進展は、『文明の衝突』を『引き裂かれる世界』へと向かわせ、「劇的にかつ急速に国家の権威を失わせていく」(ハンチントン

2002)。前述した阿部謹也(1988)による文明/文化の対比、目に見えるものを媒介にして結ばれる関係/目に見えないものによる絆、大宇宙/小宇宙の対比とハンチントンによる対比は、微妙にずれている。焦点の絞り方(プリズム)が異なっているからである。

グローバル化が進めば進むほど、文化の違い、価値の違い、生き方の違い、それぞれが目標とするものの違いも明らかになってくる。「『文化の多様性』を護るということは、個人を護ることにつながり…、それはまた個人と個人の文化が、各々の魅力を積極的に外へ向けて開かれた形で表現しあう世界、『多文化世界』の構築へ向けての一步を記すことでもあります」(青木 2003:25-6)。個性レベルと共同性レベルでの国際化をつなぐ言説が求められているのではないだろうか(草津 1992)。

第7章「交差軸の制御不能な揺らぎ」が描き出すものは、第3章で触れた出会いの衝撃(出会いが生み出す深さもの/高さものの共有)の逆転した姿である。制御不能な揺らぎは、出会いの衝撃ではなく状況の傍観と空気を読むこと(KY)を生み出しているのではないか。第8章は、その状況を能動的に変換していく可能性を考察する。

4 交差軸の能動的ずらし

本稿の結論部、第8章は「交差軸の能動的ずらし—時間/空間の圧縮と逆フロー体験を超えるには—」について考える。ずらしはジャック・デリダ(2012)の「脱構築」から示唆を受けている。コントロール不可能なものが浮上するグローバル化の時代をどう生きていくのか(ブーアスティン 1964)。生中継された9・11テロの映像は「時間/空間の圧縮」(ロバートソン 1992;ハーヴェイ 1999)を招き寄せ、地球規模での参加を強制するメディア・イベントと化した(岡村 2003;バーベラ 2006)。世界の「フラット化」(フリードマン 2010)というよりは「ゲームの終わり。今日、地球上にのしかかる全世界的均衡を乱す脅威…、世界はあまりにも広大で、あまりにも多くの人間が住み、あまりにも多様で、あまりにも制御不可能な力に貫かれている」(トッド 2004)。

西垣(2009:80-125)は、情報とはもともと生命的な概念であることから出発し、「オートポイエーシス」論を踏まえ、現代情報社会の批判的検討を試みている。

刺激を受けて体内 (in) に生じる (form) のが情報 (information) であり、それが何らかの価値 (意味) をもたらした。…「生物は主観的な世界を創りあげる。べつに設計図を引くわけではない。身体をつかって生きるという行為そのものが、世界の創出につながるのである」(ユクスキュール)。…感情は、身体感覚と左脳の論理処理をむすぶ、架け橋の役割をもっているのである。…いわゆる「情報伝達」とは、…階層関係にあるオートポイエティック・システムのモデルのもとで、はじめて明確になってくる。…人間の心には、他の身体をもつ存在の言動に共感する能力がそなわっているのだ。…言語とは霊長類の「毛づくろい」の代用品として生まれた。言語のもともとの目的は「正確な論理的判断」というより、「感情的な共鳴」だということになる(ダンバー)。…声は時間とともに流れ去っていくものだが、論理はある一時点でなりたつ空間的なものである…。『脳内シュミレーションとしての感情』が本来の「身体状態を直接反映した感情」よりもおおきな影響力をもち始める。…『想像の共同体』である。

西垣は、生命体が生きるための価値 (意味) をもたらす「生命情報」、人間が意識し、記号 (とくに言語) によって生命情報を記述・表現した「社会情報」、社会情報から記号だけをとりだしたものの、最狭義の情報としての「機械情報」を区別する。「21世紀の情報社会の最大の特徴とは、機械情報の氾濫にほかならない。」この視点から、「情報学的転換」が語られる。「広義の情報とは『生命情報』であり、言語は狭義の情報である『社会情報』に対応している。…機械的思考から生命的思考への転換を…」(西垣 126-142)。本稿の「能動的なずらし」と重なる視座が呈示されている。

生命的なコミュニティーの再構築。…人間を他律システムと見なすかぎり、我々は皆、社会的メガマシンの部品となり、「私 (自己) のリアル」は徐々に壊れていくだろう。…身体性とコミュニティーの回復が、情報社会の未来をひらくのである (西垣 152-7)。

丸山 (1984: 33-4) も同様に、J. ボードリヤールのシュミラークル論を越えていく視座を提示し

ている。

テレビがでっち上げる疑似イベントが偽物である以上に…ありとあらゆる社会生活の局面に人為的記号が人間と環境世界との間に幕を介入させ、人々はその皮膜を通して以外、生の現実と交流できなくなっているのである。…ヒトはシンボル化能力をもつと同時に実態から疎隔されシュミレーションの世界に入っている。…政治、経済圏から文化総体へ拡大した視点からの記号性の解明へ。

メディアによって伝えられる映像は、世界の際 (縁・淵・涯・果て) / 今ここ、観察 (observation) / 巻き込まれること (involvement)、メディア / 生身の人間といった二項対立図式を揺るがし続ける (港 1998; 草津 2007)。世界との生き生きとした関わり、「フロー体験」(チクセントミハイ 2005) は難しくなり、言わば「逆フロー体験」を強いられる。たとえば、テレビの画面に繰り返し流される津波の映像 (3・11) は私たちからリズムミカルな動きを奪う (丹羽ほか 2013)。

梅森直之 (2007: 186) は、情報化を進める『想像の共同体』の未来を「貿易よりも言語」が開く可能性に読み取ろうとしている。

経済は万能ではない。異なる文化に対する感受性を養おう。「他者」との出会いは、グローバル化という時代の危険性でもあり、また可能性でもある。グローバルなリズム状の歴史…。9・11のインパクトは過度に強調されすぎている。操作された映像…。ナショナリズムの記憶は、過去の事実を押しつぶし歪曲してゆく。…感覚の摩滅が引き起こされ、…人は怒るよりも、むしろより憂鬱になってしまう。余りにも膨大な量の映像が提供されることによって、その一つ一つに意味がなくなってしまう。

グローバル / ローカルの二項対立図式を能動的にずらす (脱構築する) 視座が求められている。

グローバル化のプロセスそのものの、既知の世界の崩壊の速さそのものが、予期せぬ結果を生み出しているのである。人々は、なじみの顔を、声、音、臭い、味覚、場

所が存在する、慣れ親しんだコミュニティをたぐり寄せようとする。…本物だと信じられるものを再確認すると同時に、それを実体として祭り上げるのである。…そうした絆は、その絆の親密さを基礎とした疑う余地のない親しさや忠誠心を暗黙の前提とする。それは人間の集合性を基にして実現しうる最も身近なアソシエーション（人と人との結びつき）である。…彼らを育ててくれるローカリティは、愛情の対象であると同時に、起源を同じくし、運命を共有する人々が暮らす場所でもある（コーエン&ケネディ 2003：188-9）。

ジョーゼフ・ナイは、情報化が引き起こす困惑を「三次元のチェス」になぞらえ、沢木耕太郎は共同作業としての物語作りが難しい「セルフ・ノンフィクションの時代」の到来と表現した。現代世界が私たちに与える不安は、活力あるアイデンティティの形成を困難にしていく。自己の内面への関心／はるか離れた世界への関心、自閉化／グローバル化といった二項対立図式の能動的なずらし（脱構築）が極めて難しくなる。「人類の歴史上初めて、自己と社会が地球規模で関連し合うようになった」時代、現代（ギデンズ 2001；2005）が抱え続ける問題である。

「自己」と「社会」という観念（概念）は、いずれも私たちをとらえて放さない。一方では「自閉化」、他方ではテロ、戦争、自然破壊などの地球規模のリスク（ベック 2010）への懸念、これら相反する、二つの世界への関心が共存し続ける。「自己」という内界への関心（執着、こだわりなど）と「ボーダーレス化」が進行する世界への関心（気付き、危機感など）の共存、ベクトルを異にするこれら二つの関心が結びつきを強めていくという逆説、それこそが現代の不安とアイデンティティ形成の困難を引き起こしているものではなからうか。

時間／空間の分離によって近・現代世界は成立したが、グローバル化の進展は時間／空間が圧縮された世界と向き合うよう私たちに強いる（ハーヴェイ 1999）。時間／空間の圧縮は、世界への没入と距離化との均衡状態（挑戦することの難易度と自らの能力のレベルとの釣り合い）から生じる「フロー体験」（チクセントミハイ 1996）を困難にする。フロー状態は行為への機会（挑戦）と行為の能力（技能）の釣り合うところに生まれる

（遊び・創造などの）体験であり、挑戦＞技能だと心配・不安が、挑戦＜技能だと退屈・不安が引き起こされる。「フロー」は全人的に行為に没入している時に人が持つ包括的感覚を意味し、マズロー（Maslow 1971）の「至高体験（peak experience）」や宗教性を帯びた「原初の状態」にもつながっている。チクセントミハイは、フロー体験を構成する要素を6つ挙げている。(1) 行為と意識の融合、(2) 限定された刺激領域への注意集中（意識の限定、過去と未来を放棄）、(3) 自我の喪失・世界との融合、(4) 自分の行為や環境を支配しているという感覚、(5) 首尾一貫性；行為に対する明瞭で明確なフィードバックをそなえていること、(6) 自己目的性；結果ではなく行為の中に動機を置く、絶え間ない流れ。

このようなフロー状態が困難になることは、レイモンド・ウィリアムズ（Williams 1990）が断片的映像を次々と結びつけることによりテレビが視聴者を惹きつけている状態を「フロー」と名づけたことに逆説的に表現されているのではないだろうか。社会生活において「速度」が最優先され（ヴィリリオ 2003）、シュミラクルがリアリティにとって代わり（ボードリヤール 2008）、「スペクタクル社会」（ドゥーボール 2003）、「完璧なイメージ」を求める「シャッター・チャンスの時代」（アダット 2012）が到来したとされる。

グローバル化には、統合失調症（精神分裂症）的な「ダブルバインド状況」（ベイトソン 2000）を常態化し、文化・社会・人間をつなぐ「接続詞」を私たちから奪い、history/ life historyの意味ある連関を困難にし、historical reality（歴史上の事実）/ actuality of life（生きた現実）の乖離をさらに拡げ、存在証明（アイデンティティ）の必要条件である時間／空間の拡がりとお互いを失わせるというリスクがつきまとっている。

グローバル化が進行する現代世界においては、世界の際への旅路、自己の身体から切り離され直接的感覚を越えた「情報」の世界と絶えず向き合って生きるという姿勢が求められている。しかしながら、人間にとって「旅路」の本来の意味とは、ロッド・ステュアートが歌う“Sailing”に表現されているようなものではなからうか。

“Sailing” by Rod Stewart

I am sailing, I am sailing

Home again, across the sea

I am sailing stormy waters
 To be near you, to be free
 I am flying, I am flying
 Like a bird, across the sky
 I am flying passing high clouds
 To be near you, to be free
 Can you hear me, can you hear me
 Through the dark night, far away
 I am dying, forever crying
 To be near you, to be free
 Who can say ...
 Oh yeah, to be near you, to be free

森有正 (1968) は、「はるかに行くことは、遠くから自分に帰っていくこと」だと語った。それは、「遠くから自分に帰ってくるために、はるかに出かけていく。…人間の生活には、運動と静けさ、活動と休息というようなものが、大きな一つのリズムになっている。… 安静にしていること／外へ出て自分を破壊すること…。…一人一人の人が、大なり小なり、自分が中心となる世界を作り上げていく」ことである。

見田宗介 (2006) も、いまここ／彼方とを繋ぐ視点の重要性を指摘する。「人間のつくる社会は、千年という単位での、大きな曲り角にさしかかっている一転換の時代にあって、歴史の果てから『現代社会』の絶望の深さと希望の巨大さとを共に見晴るかす視界…。」その「視界」を、真木悠介 (2013) は次のように表現している。

<持続可能な幸福な世界>は、他者や自然との<交歓>という単純な祝福を感受する能力の獲得をとおして、<現在>の生が、意味に飢えた目を未来にさしむける必要もなく充実してあることによって初めて可能である。… (それを支えられるのは、) 生きることの単純な幸福を感受する能力という、<感性的な基底>だけである (真木 2013)。

阿部謹也 (1988: 13-18) は、自らの学問追求の支えとなった学生時代の恩師、上原専六のことは引いて、生きてゆくことと学問の接点について語った。

「どんな問題をやるにせよ、それをやらなければ生きてゆけないテーマを探すのですね。

…それでいったい何が解ったことになるのですか。…解るということはそれによって自分が変わるということでしょう」(上原先生)。…しかし、「解る」ということはただ知ること以上に自分の人格にかかわる何かなので、そのような「解る」体験をすれば、自分自身が何がしかは変わるはずだとも思えるのです。

C. W. ミルズ (Mills 1959) の history / life history (biography) の対比は、E. H. エリクソンの reality (歴史上の事実) / actuality (生きた現実) と重なる。過去から未来に向かって進む時間 (「歴史」) へのまなざし (「歴史認識」) と 人と人との間 (人間)・人生へのまなざし、「まだ来ない」未来から「現にある」現在を通して、過去へ向かって「過ぎ去る」時間との対比 (木村敏) である。「今ここを生きること」の意味は、そこから浮かび上がってくる。

ミルズが呈示しているのは、“To be radical = Making history + Making life” という生きることに関わった方程式である。歴史を創ることと命を育むことをつなぐ試みこそが根源的な (根ざした) 生き方である、というメッセージである。存在証明 (アイデンティティ) に拡がり と 奥行き を与える知の技である。

もしも私が、私のために存在しているのでないとするれば、だれが私のために存在するのだろうか。

もし私が、ただ私のためにだけ存在するのであれば、私とはなにものであろうか。

もしいまを尊ばないならば—いつというときがあるだろうか。

『タルムード』 (E. フロム 1965: 1)。

自己と社会の切り離しの作業なしには、自分を越えた世界の中の場所—「象徴的なもの」—との出会いは訪れてこない。(社会という) 共同体によって認められた自己像に揺らぎを与える痛みを伴ったこの作業は、私たち誰もが背負わざるをえない試練であり、現代を生きるための技術でもある (ミルグラム 1980)。

しかしながら、「象徴的なもの」との出会いをひたすら目指して生きるとは、私たちの内にある大切な何かをどこかに置き去りにしてしまうことでもある。この忘却され、失われていくものを

救い上げ、意味ある出会いの総体（積分）としての現代「情報社会」を生きていくこと、その可能性を探り続けてゆくことを私たちは求められている。交差軸の能動的ずらしに光を当てた丸山のことば（1984：139-140；260）を紹介しておこう。

カオスは、過剰なるコスモスとほぼ同時に誕生した。「カオスがコスモス化した」のではなく、「コスモスがカオスを生み出した」。これは、「エスが自我化した」のではなく、「意識が無意識を生み出した」と同様である。つまり、動物には存在しないカオス＝エスや無意識が人間においてのみ誕生したのは、コスモス＝ランゲージュ＝＜言分け構造＞が生じて自我や意識を生み出し、＜身分け構造＞を破壊した瞬間からであった。…人間文化の本来的流動性を回復させ、意味の発現場場に立ち戻る可能性を手探りすること…。この発現場場は一切の二分法が成立する以前の動きの場でもある。この意味での文化のゲネシスを照射する営為は、決して人間の系統発生的「起源」を求めることではなく、「今、ここ」での「生起・現出（ニーチェ）」の探求であり、そこには警鐘を絶えずつき崩す運動と運動（うごき）を絶えず形象（かたち）とする力が登場する舞台である。

世界の拡がりや屈折率を記した地図（プリズム）を常に携えて、独自の読解を通して「旅路」を歩んでゆく技（リズム）、そこから生まれる未来を切り開く可能性を本稿は探ってきた。

地図には世界の拡がりや境界が記されている。その世界の「普遍性」を、「時間的な境界をもたず、その意味で、歴史の外部ないしは終わりに位置するような体制…帝国…」（ネグリ & ハート 2003）の「拡がり」と向き合うことが求められている。

同時に、世界の「奥行き」と向き合うこと、身近な世界に関わり（関心を抱き）続けること（「特殊性」を生きること）が求められている。文化は、ローカルなアイデンティティ（エスニシティなど）を構成する最も重要な要素であり続ける。

さらに、取替えのきかない（かけがえのない）固有な存在としての自己を形成していくことが求められている。内面世界への関心を抱き続けること（「個性性」を生きること）である（草津 1992）。世界と能動的に切り結ぶための感受性（知

性＝強さ／感性＝しなやかさ）、制御不能な揺らぎに抗して交差軸を能動的にずらす力が生まれてくるとすれば、そこからだろう。丸山（1990）は、その営み、プリズムとリズムの交差軸の能動的なずらしを、「生の円環運動」と名づけた。

“Think global, act local, and be yourself.”

プリズムとリズムが「世界」を生み出すということは、世界の拡がりから絶えず目を逸らさず、今ここを生き抜くことを通して、私自身の人生を創り上げていくことではないだろうか。

文献リスト他

<日本語文献>

- 青木保『多文化世界』岩波（新書）、2003年。
 東昭二『言語学者が政治家を丸裸にする』文藝春秋、2007年。
 アダット、キク（福井昌子訳）『完璧なイメージ映像とメディアはいかに社会を変えるか』早川書房、2012年。
 阿部謹也『自分の中に歴史を読む』筑摩書房、1988年。
 アルチュセール、ルイ（山本哲士ほか訳）『アルチュセールの「イデオロギー論」』三交社、1993年。
 アレント、ハンナ（志水速雄訳）『人間の条件』ちくま（学芸文庫）、1994年。
 アンダーソン、ベネディクト（白石さや・白石隆訳）『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』NTT出版、1997年。
 アンダーソン、ベネディクト（糟谷啓介ほか訳）『比較の亡霊』作品社、2005年。
 一川誠『錯覚学—知覚の謎を解く—』集英社（新書）、2012年。
 今井むつみ『ことばと思考』岩波（新書）、2010年。
 ヴィリリオ、ポール（土屋進訳）『瞬間の君臨—リアルタイム世界の構造と人間社会の行方—』新評論、2003年。
 ウェーバー、マックス（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神（改訂版）』岩波書店、1989年。
 ヴェイユ、シモーヌ『著作集Ⅲ 重力と恩寵』春秋社、1968年。
 ヴェイユ、シモーヌ『著作集Ⅴ 根を持つこと』春秋社、1967年。
 ウォーラスティン、イマニュエル（河北稔訳）『新版 史的システムとしての資本主義』岩波書店、1997年。
 梅森直之編著『ベネディクト・アンダーソン グローバリゼーションを語る』光文社（新書）、2007年。
 エリクソン、E.H.（村瀬孝男・近藤邦夫訳）『ライフサイクル』みすず書房、1989年。
 岡村黎明『テレビの21世紀』岩波書店、2003年。
 カー、E.H.（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』岩波（新書）、1962年。

- 金沢創『他人の心を知るとのこと』角川 (one テーマ 21)、2003年。
- 河合隼雄『家族関係を考える』講談社 (現代新書)、1980年。
- ギアツ、クリフォード (吉田慎吾ほか訳)『文化の解釈学』岩波書店、1987年。
- ギデンズ、アンソニー (松尾精文訳)『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結—』而立書房、1993年。
- ギデンズ、アンソニー (佐和隆光訳)『暴走する世界—グローバル化—は何をどう変えるのか』ダイヤモンド社、2001年。
- ギデンズ、アンソニー (秋吉美都ほか訳)『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会—』ハーベスト社、2005年。
- ギリガン、キャロル (岩男寿美子訳)『もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ—』川島書店、1986年。
- 草津攻「アイデンティティの社会学」『思想』1978年10月。
- 草津攻「『日本の自我』論」安田三郎他編『基礎社会学Ⅰ』東洋経済新報社、1980年。
- 草津攻「文化交流における誤解と理解」、斎藤真ほか編『国際関係における文化交流』日本国際問題研究所、1984年。
- 草津攻「ゆらぎ社会の『わたし』作り—自己形成のパラドクス—」『青年心理』81号、1990年5月。
- 草津攻「農村の『国際結婚』をめぐる言説—個性レベルと共同性レベルでの国際化へ—」、文部省科学研究費補助金 (1987—89) 一般研究 (B) 成果報告書『諸地域における移民労働者の実態に関する比較研究』(津田塾大学)、1992年。
- 草津攻「アイデンティティの社会学」、見田宗介ほか編『講座現代社会学2、自我・主体・アイデンティティ』岩波書店、1995年。
- 草津攻「映像空間の逆説—権威としてのメディアから架け橋としてのメディアへ—」津田塾大学『国際関係学研究』No.33、2007年。
- コーエン、ロビン&ポール・ケネディ (山之内靖ほか訳)『グローバル・ソシオロジーⅡ。ダイナミクスと挑戦』平凡社、2003。
- ゴッフマン、アーヴィング (石黒毅訳)『行為と演技』誠信書房、1974年。
- 小林秀雄「信ずることと知ること」『新潮』1983年4月臨時増刊号。
- ザゾ、ルネ (加藤義信訳)『鏡の心理学—自己像の発達—』ミネルヴァ書房、1999年。
- シェリフ、マザファー (重松俊明訳)『準拠集団—青少年の同調と逸脱—』黎明書房、1968年。
- ジラルド、ルネ (古田幸男訳)『欲望の現象学—ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実—』法政大学出版局、1971年。
- 新宮一成『ラカンの精神分析』講談社 (現代新書)、1995年。
- ジンメル、ゲオルグ (円子修平ほか訳)『著作集7 文化の哲学』白水社、1976年。
- スタフォード、バーバラ M. (高山宏訳)『ヴィジュアル・アナロジー—つなぐ技術としての人間意識—』産業図書、2006年。
- 杉原厚吉『だまし絵のトリック—不可能立体を可能にする—』化学同人、2010年。
- 杉原厚吉『エッシャー・マジック—だまし絵の世界を数理で読み解く—』東大出版会、2011年。
- 鈴木孝夫『言葉と文化』岩波 (新書)、1973年。
- スミス、ロバート J. (村上健・草津攻訳)『日本社会—その曖昧さの解明—』紀伊国屋書店、1995年。
- スレイター、ローレンス (岩坂彰訳)『心は実験できるか—20世紀心理学実験物語—』紀伊国屋書店、2005年。
- 竹内芳郎『文化の理論のために—文化記号論への道—』岩波書店、1981年。
- 館璋『人工現実感』日刊工業新聞社、1992年。
- チクセントミハイ、M. (今村浩明訳)『フロー体験—喜びの現象学—』世界思想社、1996年。
- デュルケム、エミール (宮島喬訳)『社会学的方法の規準』岩波文庫、1978年。
- デリダ、ジャック (足立和浩訳)『根源の彼方に グラマトロジーについて (上)』現代思想社、2012年。
- 土井隆義『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま (新書)、2008年。
- ドゥボール、ギー『スペクタクルの社会』ちくま書房、2003年。
- トッド、エマニュエル (石橋晴己訳)『帝国以降 [アメリカシステムの崩壊]』藤原書店、2003年。
- ナイ、ジョーゼフ「情報化時代のソフトパワーを検証する」(フォーリン・アフェアーズ・ジャパン編・監訳)『フォーリン・アフェアーズ傑作選 1922-1999』朝日新聞社、2001年。
- ニーチェ、フリードリッヒ (原佑訳) 全集 12・13『権力への意志』ちくま (学芸文庫)、1993年。
- 西垣通『メディアの森』朝日新聞社、1998年。
- 西垣通『ネットとリアルのあいだ—生きるための情報学—』ちくま (プリマール新書)、2009年。
- ニスベット、R.E. (村本由紀子ほか訳)『木を見る西洋人 森を見る東洋人 (The Geography of Thought)』ダイヤモンド社、2004年。
- 丹羽義之・藤田真文『メディアが震えた：テレビ、ラジオと東日本大震災』東大出版会、2013年。
- ネグリ、アントニオ & マイケル・ハート (水嶋一憲ほか訳)『<帝国>グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社、2003年。
- ハイダー、フリッツ (大橋正夫訳)『対人関係の心理学』誠信書房、1978年。
- ハーヴェイ、デヴィッド (吉原直樹訳)『ポストモダニティの条件』青木書店、1999年。
- パーソンズ、タルコット (富永健一郎ほか訳)『人間の条件パラダイム—行為理論と人間の条件 第四部—』勁草書房、2012年。
- バーレンボイム、ダニエル & エドワード・サイード (中野真紀子訳)『音楽と社会 (Parallels and Paradoxes)』みすず書房、2004年。
- バタイユ、ジョルジュ (澁澤龍彦訳)『エロティシズム』二見書房、1973年。

- 浜日出夫「マクルーハンとゲールド」井上俊ほか編『講座現代社会学 22 メディアと情報化の社会学』岩波書店、1996年。
- ハロー、ハーリー（梶田正巳訳）『ヒューマン・モデル—サルの学習と愛情—』黎明書店、1985年。
- ハンチントン、サミュエル（鈴木主税訳）『文明の衝突』集英社、1998年。
- ハンチントン、サミュエル（山本暎子訳）『引き裂かれる世界』ダイヤモンド社、2002年。
- ピッカート、マックス（佐野利勝訳）『沈黙の世界』みすず書房、1964年。
- ブーアスティン、ダニエル（星野郁美ほか訳）『イメジ（幻影）の時代—マスコミが製造する真実—』東京創元社、1964年。
- 福原安平『ラカン—鏡像段階—』講談社、1998年。
- フーコー、ミシェル（田村叔訳）『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社、1977年。
- フーコー、ミシェル（小林康夫ほか訳）『ミシェル・フーコー 思考集成（9）自己、統治性、快楽』筑摩書房、2001年。
- ブラス・デイヴィッド（井上俊也訳）『日本人の生き方—現代における成熟のドラマ—』岩波書店、1985年。
- フリードマン、トーマス（伏見威蕃訳）『フラット化する世界—経済の大転換と人間の未来—』（普及版）、日本経済新聞社、2010年。
- フロム、エーリッヒ（日高六郎訳）『自由からの逃走（新版）』東京創元社、1965年。
- バイトソン、グレゴリー（佐藤良明訳）『精神の生態学（改訂版）』新思索社、2000年。
- フロイト、シグムント（高橋義孝訳）『精神分析入門』新潮社、1977年。
- ベック、ウルリッヒ（島村賢一訳）『世界リスク社会論—テロ、戦争、自然破壊—』筑摩書房、2010年。
- ボードリヤール、ジャン（竹原あき子訳）『シミュラクルとシミュレーション』法政大学出版局、2008年。
- ホール、エドワード（日高敏隆訳）『隠れた次元』みすず書房、1970年。
- ホール、スチュアート（山中弘ほか訳）A.D. キング編『文化とグローバル化—現代社会とアイデンティティ表現—』玉川大学出版部、1999年。
- マクルーハン、マーシャル（森常治訳）『ゲーテンベルクの銀河系—活字人間の形成—』みすず書房、1986年。
- マクルーハン、マーシャル（栗原裕ほか訳）『メディア論—人間の拡張の諸相—』みすず書房、1987年。
- マクルーハン、マーシャル他（南博訳）『メディアはマッサージである』河出書房新社、1995年。
- マルクーゼ、ハーバート（南博訳）『エロスの文明』紀伊国屋書店、1958年。
- 丸山圭三郎『文化のフェティシズム』勁草書房、1984年。
- 丸山圭三郎『言葉・狂気・エロス—無意識の深みにうごめくもの—』講談社（現代新書）、1990。
- 真木悠介『思想のことば』『思想』岩波書店、2013年6月。
- 見田宗介『社会学入門—人間と社会の未来—』岩波（新書）、2006年。
- ミード、G.H.（河村望訳）『精神・自我・社会』人間の科学社、1995年。
- 港千尋『映像論』NHK ブックス、1998年。
- 港千尋「イメージ空間の戦い—ここでは事実の輪郭が消えている—」『影絵の闘い—9・11以降のイメージ空間—』岩波書店、2005年。
- 宮台真司『終わりなき日常を生きろ—オウム完全克服マニュアル—』筑摩書房、1998年。
- ミルグラム・スタンレイ（岸田秀訳）『服従の心理』誠信書房、1980年。
- 村上春樹『海辺のカフカ』新潮社、2002年。
- 森有正『バビロンの流れのほとりにて』筑摩書房、1968年。
- 山極寿一『暴力はどこからきたか—人間性の起源を探る—』NHK ブックス、2007年。
- 柳文章『翻訳語成立事情』岩波（新書）、1982年。
- 山田登世子『ファッションの技法』講談社（現代新書）、1997年。
- 山本七平『「空気」の研究』文春（文庫）、1983年。
- ラカン、ジャック『テレヴィジョン』青土社、1992年。
- ラタネ、ビブ&ジョン M. ダーリー（竹村健一訳）『冷淡な傍観者—思いやりの心理学—（新装版）』ブレン出版社、1997年。
- リクル、ポール（久米博ほか訳）『解釈の革新』白水社、1978年。
- レヴィット、カール（柴田治三郎訳）『ウェーバーとマルクス』未来社、1966年。
- ローゼンタール、A.M.（田畑暁生訳）『38人の沈黙する目撃者—キティ・ジェノヴィーズ事件の真相—』青土社、2011年。
- ローレンツ、コンラッド（日高敏隆訳）『ソロモンの指輪—動物行動学—』みすず書房、1980年。
- ロバートソン、ローランド（阿部美哉訳）『グローバリゼーション—地球文化の社会理論—』東大出版会、1992年。
- 鷺田清一『じぶん—この不思議な存在—』講談社（現代新書）、1996年。
- 鷺田清一『普通を誰も教えてくれない』潮出版社、1998年。
- <英語文献>
- Collier, A. R.D. *Laing: The Philosophy & Politics of Psychotherapy*. N.Y.: Pantheon, 1997.
- Erikson, E.H. (ed.) *Adulthood*. N.Y.: Norton, 1978.
- Headland, Thomas, Kenneth Pike and Marvin Harris *Emics and Etics: The Insider/Outsider Debate (Frontiers of Anthropology)*. London: Sage Publication, 1990.
- Kusatsu, O. "The Cultural Universality of Durkheim's Moral Development Hypothesis (I-IV)" 『国際関係学研究』（津田塾大学）13-16号。『津田塾大学紀要』20号。1987-90年。
- Kusatsu, O. "The universality of Durkheim's moral development hypothesis: Japan and the United States." Ph.D. dissertation submitted to The Department of Sociology of The University of Chicago, 1989.
- Laing, R.D. *Self and Others*. N.Y.: Penguin Books, 1961.
- Laing, R.D. *Interpersonal Perception*. N.Y.: Harper & Row,

1966.

- Laing, R.D. *The Divided Self*. N.Y.: Pantheon Books, 1969.
(レイン、R.D.、阪本健二ほか訳『引き裂かれた自己—分裂病と分裂病質の実存的研究』みすず書房、1971年)。
- Lebra, Takie Sugiyama *Japanese Culture and Behavior: Selected Readings*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1986.
- Maslow, A. *The Further Reaches of Human Nature*. N.Y.: Viking Press, 1971. (エイブラハム・H. マズロー、上田吉一訳『人間性の最高価値』誠信書房、1973年)。
- Mair, Miller "Metaphors for Living," *Nebraska Symposium on Motivation*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1976.
- Mayhew, Leon H. ed. *Talcott Parsons on Institutions and Social Evolution, Selected Writings*. Chicago: University of Chicago Press, 1982.
- Mills, C.W. "The Cultural Apparatus," *Power, Politics and People* edited by Irving Louis Horowitz. N.Y.: Ballantine Books, 1963.
- Mills, C.W. *The Sociological Imagination*. N.Y.: Grove Press, 1959. (C.W. ミルズ、鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店、1965年)。
- Plath, D.W. (ed.) *Work and Lifecourse in Japan*. Albany: State University of New York, 1983.
- Schmalenbach, Herman "The Sociological Category of Communion," *Theories of Society: Foundations of Modern Sociological Theory* (edited by Talcott Parsons et al.) . N.Y.: The Free Press, 1961.
- Sites, Pau, *Control and Constraint*. N.Y.: Macmillan, 1975.
- Williams, Raymond *Television: Technology and Cultural Form*. London: Routledge, 2003.

<新聞記事>

- 井上ひさし「接続詞のない時代に・感動詞から離れ、考えるヒトに戻ろう」朝日新聞 2004年。
- 草津 攻「家庭は秘密の居場所を与える記号の倉庫である—意味の能動的涵養を通じた人格形成—」(M. チクセントミハイほか、市川孝一ほか訳『モノの意味—大切な物の心理学—』誠信書房、2009年、書評)「週刊読書人」2011年4月23日。
- トッド、エマニュエル「世界秩序にかなめなし—イスラムにも近代化の試練」朝日新聞、2004年。
- 吉岡 洋「ネットで『世界』は狭く、情報は身体を離れる」朝日新聞(夕刊)2002年3月15日。
- 山極寿一「殺戮しない類人猿、攻撃は共存の手段」朝日新聞 2002年4月12日。

<放送>

- NHK 教育「サムライ福澤諭吉・アメリカの地に立つ」『その時歴史が動いた』2002年12月放送。
- アグネス・チャン「人権教育の大切さ」『視点・論点』NHK 教育、2000年5月放送。

<インターネット>

- 高橋晋ほか「場所細胞」(「脳科学事典」<http://bsd.neuroinf.jp/wiki/場所細胞> 2013年8月9日)。